

校名：広島大学附属中・高等学校

所在地：〒734-0005 広島市南区翠一丁目1番1号 電話番号：082-251-0192

記載日：2017年 2月 3日 記載者：

記載者役職：副校長

校風、おおまかな特色について：

本校は、中学と高校を併設しているが、一体的な校務運営を行っており、教員は双方の学習指導・生徒指導にあたっており、文化祭や体育祭なども中学・高校合同で行っている。

1905（明治38）年、広島高等師範学校附属中学校として創立以来、110年を超える伝統の中で、本校が目指してきたものは「真の優秀さの追究」である。受験学力だけではない優秀さ＝豊かな人間性を確立すること、追究することこそが、本校が目指す教育である。本校の教育の根底には、徳育、知育、美育、体育の調和を図る「全人教育」の思想が脈々と受け継がれており、自由・自主・自律の校風の中で、生徒たちが持つ無限の可能性を引き出し、個人的・社会的特性を向上させることこそ、確かな知性と豊かな人間性を育むことをめざし続けている。

生徒たちの自主性を最大限に尊重する教育方針に基づき、文化祭や体育祭などの学校行事は、生徒たちが主体的に創り上げている。その活動を通して生徒たちは、試行錯誤し、つまずき、失敗を繰り返す。しかしながら、失敗を克服していく過程において、多くを学び、リーダー性と協調性が養われていく。生徒たちが多くのことを学び、じっくり考えることのできる、ゆったりとした時間と環境を大切にしている学校である。

卒業生の活躍状況について：

① 学校が追跡調査をしているかどうか、また、その方法

SSH事業の一環として近年、実施している。

封書を郵送して附属高等学校に回答返信を求める方法。

② どの程度、把握できているか、また、その情報はどこが持っているか（大学、学校園、その他）

全生徒対象の調査ではない。SSコース卒業生に限っての附属高等学校が行う調査。

③ 状況を具体的に

回答者の多くが研究職をめざし大学院に在学中。就職者についても理数系教科の高等学校教員として他のSSHで教科指導に従事するなど、本人たちにも本校でのSSHの取組みが活かしているという自覚が高い。

※ 卒業生全般の活躍状況については、組織率の高さを誇る同窓会（アカシア会）と日常的な連携がとれており、情報を得られる環境がある。

勤務経験者が公立学校・教育委員会などへ戻った後の活躍状況について：

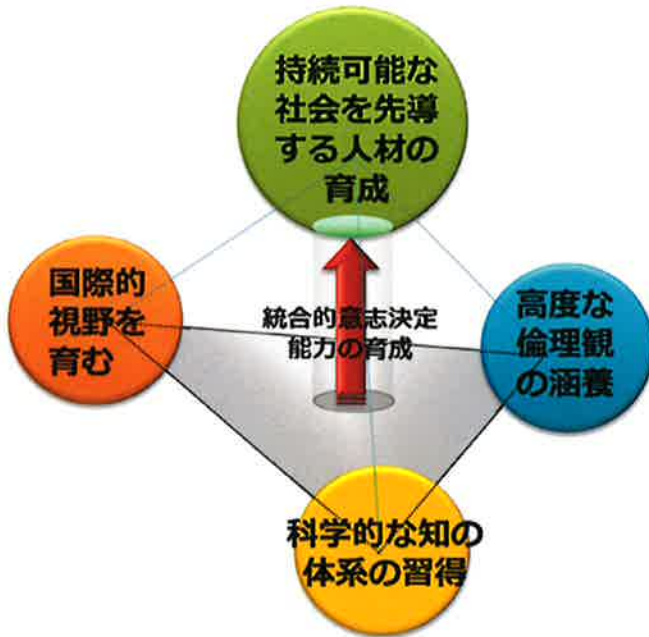
① 追跡調査をしているかどうか 「していない」

② 状況を具体的に

【経験者本人からの情報によると】 県教育委員会中等教育学校準備室企画官、県教育委員会高校教育指導課指導主事、県教育委員会学びの変革推進課指導主事など
 広島県のみならず、他県の地方教育行政においても指導的立場で多く活躍している。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて

◇SSHの取組み



2003年度より3期14年間にわたって文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けている。現在は、以下の三つを課題としてカリキュラム開発の実践・研究の取組みを展開中である。

- ア 「科学的な知の体系」を習得する教育内容・方法の開発
 - イ 国際的視野を育むプログラムの開発
 - ウ 高度な倫理観を涵養し、「持続可能な社会」を先導するためのカリキュラム開発
- また、SSH重点枠の指定も受け、海外連携・交流学习によってESDの視点、国際的視野、語学力の育成を重視したプログラムを開発中である。これらの取組みにおいて、地域の公立

立学校との交流学习会や海外研修への共同参加などのプログラムも実現させてきた。

◇ESDの取組み（1校1スクールとしての営み）…教師が繋がり、教育活動をつなげる

本校は、1953（昭和28）年に開始したユネスコ協同学校計画による教育実験計画への当初からの参加校であり、その意味で世界最初のユネスコスクールといえる。現在も活動を推進しており、「ESDの10年」の初年度にあたる2005年には、第61回全国高校ユネスコ研究大会（広島大会）の主管校として、ESDを基底にした大会運営を実行するなど、これまでの教育実践の蓄積を土台として、歴史・地理・生物・化学・数学・国語・家庭科の教師による総合科目「ESD」を創設し、授業とフィールドワークを一体化した合科的なESDの実践を展開してきた。SSH指定後のカリキュラムにも「ESD研究」「ESD汎論」として活かされ、ESDを紐帯とした、ユネスコスクールとしての営みとSSHの研究開発との一体的なカリキュラム運営を構築している。「ESDの10年」の最終年度、2014年には第5回ESD大賞ユネスコスクール最優秀賞を受賞した。

◇海外研修

固定された姉妹校ではなく、そのつど協力の得られた学校に滞在したり訪問したりして、生徒と交流をする本校独自のプログラムとして実施。高等学校第Ⅰ学年の希望者を対象として春休みに実施しているオーストラリア研修やイギリス研修は、2003年の開始以来参加者が徐々に増加し、近年では70～80名が参加。約2週間、ホームステイをしながら現地の学校に通い、現地の人々との交流を通して異文化を経験すると同時に、自己を見つめ直す成長の機会としてとなっている。

◇学校祭 … この呼称で、かつて3日間連続で行われていた文化祭と体育祭の開催を分離した。

① 文化祭

6月に開催している。中学校はクラスでの演劇、高等学校はクラブサークル・クラスサークル・

学校サークル・オリジナルサークルなどのサークル活動を中心に活動する。高校Ⅱ年生を中心として組織される文化祭運営局が方針を決め、計画を立て、準備、実施、後片付けと全てにわたって、自主的な活動がなされている。本校の伝統的校風である「自由・自主・自律」を色濃く反映している行事である。平成29年度は9月開催に変更。

② 体育祭

9月上旬に開催している。高校Ⅲ年生を中心とする体育祭運営局によって企画から運営まですべて生徒の手で行っている。入念な準備にエネルギーを注ぎ、8月下旬からは中学では競技練習、高校ではそれに加えてパート活動を本格的に行う。体育祭当日は赤白の選手団に分かれて競い合い、またマ스ゲーム・応援団・チアリーダーの演技や櫓・山車の披露など、活動の成果が発揮される。生徒が主体となってつくりあげる中高合同の一大行事である。平成29年度は6月開催に変更。

◇学部附属共同研究（附属と大学）

1969年に「広島大学教育学部附属共同研究体制」として発足し、現在では広島大学全11附属学校園の教員と大学教員との共同研究体制が敷かれている。2015年度の場合、31チーム、延べ300人が、連携しながら研究をすすめ、1972年度から続いている『学部附属共同研究紀要』の第44号を刊行した。附属学校が教育実践研究の場としてかけがえのないことの証でもある。

◇現職教員研修（地域の教育行政との連携）

広島県からは毎年1~2名、呉市からは2年ごとに1名の現職教員が6ヵ月間、本校を研修場所として教科指導について本校教員からの支援を受けて実践研究を行っている。

◇キャリア教育（大学、地域、卒業生）

附属学校と広島大学産学・地域連携センターの協力のもと、中学校2年生の現場体験学習を受け入れていただける地域の事業所や卒業生が関わる事業所を募り、事前学習・体験学習・学習発表会・報告書作成までのプログラム開発などをすすめている。

◇キャリア講座（地域、卒業生）

進路指導部が中心となって、高等学校第Ⅰ学年と中学校第3学年を対象に毎年幾人かの地元在住の若手卒業生たちから職業の実際や学生時代のことなど語ってもらい、交歓する集いを行っている。近年では、地元地域に限らず、遠隔の同窓会支部からも卒業生を講師として派遣していただける広がりが生まれている。

◇PTA 進路座談会（PTA、卒業生）

PTAと進路指導部が連携し、保護者を主な対象として毎年6月に実施している。他の教育関係団体などから招いた講師による時期に応じたテーマの講演と現役大学生が体験を語り合うパネルディスカッションを実施している。

◇合唱班、管弦楽班 定期演奏会（卒業生、地域）

毎年の夏休みに、合唱班、管弦楽班がそれぞれの卒業生の支援を受けながら、定期演奏会を開催し、地域への文化発信を続けている。

◇アカシア賞

本校の教育の理念である「調和のある全人的教育」を推進するために、本校の象徴である「アカシア」を冠した賞を設けている。学校生活全般に意欲と活力を生じさせようという意図によって、本校生徒の優れた活動・業績を表彰するものである。1951年に創設されて以来、時代背景に応じて表彰規定も何度か改訂されているが、教科外活動も奨励し、生徒の長所を発見し個性を伸ばさせ、真・善・美を追究する生徒を育成しようとする当初のねらいは一貫し踏襲されている。

授与式での受賞者挨拶は、先輩から後輩へ送る感謝と激励のメッセージとして、生徒たちのモラルを高め、優れた教育効果を生みだしている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

◇各教科の公開研究授業を中心に研究協議、研究発表、講演などを実施する「中学校・高等学校教育研究大会」には、全国各地から500名を超える参加者が集う。時代や現場の要請にかなった先導的発信の能力をもつ存在。

◇教科指導実地研修の場として現職教員を指導できるスタッフ・設備・制度が整っている存在。

◇本校入学を志願する児童生徒数は、少子化の影響をさほど受けることもなく、地域において概ねトップであり続けているように、地域の子どもや保護者が最も行きたい、行かせたい学校として認知される存在。

◇広島大学に研究交流に訪れている教育研究者や教育行政担当者の方々をはじめ、海外からの教育関係者による本校視察がしばしば行われる。地域のモデル校として認知されている存在。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

広島大学は、長い歴史の中で日本全国各地に多くの教員を輩出しており、特色ある教員養成プログラムがある。それを附属学校は支えている。広島大学では教職免許を望む学生のすべてが広島大学の附属学校で教育実習をおこなうこととしているからである。2016年度の場合は、教育実習指導A…186名、小学校実習Ⅰ…186名、小学校実習Ⅱ…30名、教育実習指導B…277名、中・高等学校教育実習Ⅰ・Ⅱ…339名、中・高教育実習Ⅲ…116名、幼稚園教育実習…32名など、延べ合計1166名の学生の実習を担っている。その他に、実習入門、実習指導C、実習観察、それに医学部・歯学部と行う養護実習も加わる。

中高の、いわゆる本実習に限っても年間6週間に及び、本校では延べ353名の教育実習生から生徒たちは不慣れな授業をうけている。生徒の学習に関わることでもあるから、附属学校教員は教生の授業準備の指導を丁寧に行う。研究開発指定を受けて先導的な研究、カリキュラム開発に取り組む一方で、多くの教育実習生を受け入れ、標準的なカリキュラムをベースとした教生用授業の単元を用意しなければならないのである。大きなエネルギーを必要とする。が、附属学校教員が大学教員から指導を受ける研究開発・共同研究と学生を指導する教育実習を往還することによって、附属学校教員は自らの授業を対象化する力、科学する力をさらに高める。ここに研究と実習指導との相乗効果が生まれる。だからこそ、附属学校においては、各教科それぞれの理念をもって個性的な授業が展開されている。生徒には常に思考を迫り、判断させ、書くこと、発表することを導く。附属学校のこのような日常、豊かな教育内容をもって教員養成を担っているのである。附属学校教員が教員養成系大学の教員としても貢献できうる所以でもある。

附属学校の豊かな教育力に育まれた生徒たちは、実習生の授業をうけながら「先生が言いたいこと、教えたいことは…」などの問いをたて、自らの学びを対象化し、主体的な学習を生み出す契機として実習生の授業を経験する。本校が自由・自主・自律、全人教育を謳うように、附属学校のほとんどが生徒の主体性を育むことを教育理念や教育目標として重きを置いている。それは、たやすく実現はしそうなことを承知していながら、それゆえに、例えば上記のようにそれを生み出す契機を学校の日常に発見する営みをつづけるのである。主体性を育むという教育の永遠の理想が附属学校にはありつづける。大学にとっても国にとっても、なくてはならないものである。